

調和性が高い人の信頼と疑い

阿久津 洋巳*, 立花 琴子**

(2018年2月14日受理)

Hiromi AKUTSU Kotoko TACHIBANA

Trust and Doubt of a Person with High Agreeableness

本研究は性格5因子の調和性が高い人の人を信じる傾向を調べた。本研究では、場面想定法質問用紙を用いて、登場人物の信頼性に関する情報を提示した後、登場人物のとり行動を選択させた。個人の特性として、調和性と一般信頼性を検討した。ネガティブ情報が与えられたときは、信頼性が高い個人は信頼性が低い個人と同程度に相手を疑うという先行研究と同様な結果を得た。他人を信じる傾向が高い人は、相手に関する情報に敏感であり、だまされやすいわけではないことが確認された。調和性と一般信頼性の間には弱い相関があったが、個人の特性としては一般信頼性よりも調和性の方が、質問紙の結果を適切に説明した。

I. 問題と目的

信頼は人の社会生活では不可欠の要素である。人は毎日多くの人と会い、協同する。顔を合わせることがなくても、電話やインターネットを介した対人交渉がある。このような対人交渉の中で、他人を信頼したり、あるいは自分を信頼してもらう場面は日常頻繁に生じる。対人交渉の場面で、他人を信じやすい人ほど騙されやすいと思われている。本研究は、他者を信頼する傾向を性格特性の観点から検討する。

だまされやすさは、日常的に観察される。近年「振り込め詐欺」が話題に上る時に、被害者の特性が議論となることがある。私たちの日常的な理解では、素朴に人を信じる人がいるようである。人の言動を額面どおりに受け取り、隠し事や深慮遠謀を推測することがない人である。このような人はだまされやすいように思える。この対極

に、猜疑心が強い人がおり、何事も疑い、他人の行動の細部を吟味して悪意を想像する。他人を簡単には信用せず常に疑ってかかる人は、用心深くどのような人に対しても相手を多方面から分析する態度があるため、人を信用しやすい人に比べると、だまされにくいように思える (Garaske, 1975, 1976)。

ところが、人を信じやすい人が必ずしもだまされやすいわけではないことが報告されている (Rotter, 1967, 1980)。人を信じやすいことは、疑うべき理由がある時にも相手を信じてしまうということではないと考え、相手を怪しいと考える何らかの情報があるならば、人を信じやすい人でもだまされないであろうと主張された (Rotter, 1976)。この主張に対しては、「人を信じやすい」というのは、疑うべき場合でも疑わない傾向を含むのではないかと、という疑問が生じる。そこで「人

を信じやすい」を限定的に定義する必要が生じる。

「信じやすさ」の概念を整理するために、信念としての信頼と情報にもとづいた信頼を分けることができる。情報にもとづいた信頼を「他者一般に対する信頼」と定義し、一般信頼性と名づける考えである（菊池・渡邊・山岸, 1997）。一般信頼性が高い人は、盲目的に相手を信頼するのではなく、相手の信頼性が低いことを示す情報がある場合には、この情報に反応して他者の信頼性の程度を低く判断すると仮定された。菊池たちは2つの実験を用いて、この仮説を支持する結果を得た。一般信頼性が高い人は、低い人に比べて、対人関係のなかで得られる情報をその他者の信頼性の評価に積極的に用いる傾向があった。

一般信頼性を他者一般に対して相手に関する情報がない場合に相手を信頼する程度と定義する（小杉・山岸, 1998）。操作的には、他者一般に対する信頼に関する質問項目によって測定される。例えば、Rotter の ITS (Rotter, 1967) や山岸の信頼尺度 (Yamagishi, 1986; Yamagishi & Yamagishi, 1994) などの質問紙があげられる。小杉と山岸 (1998) は、山岸の信頼尺度から「ほとんどの人は信用できる」「ほとんどの人は基本的に正直である」などの6項目を選んで一般信頼性を測定した。

他者に関する情報が付加されたときに、人を信じやすい人がどう行動するかを考えると、一般信頼性が高い人は、(1) 他者に関する情報がなければ、その人を信用するであろう。さらに (2) 他者に対する肯定的情報が与えられれば、その人を信用するであろう。反対に (3) 他者に対する否定的情報（信頼できないことを示唆する情報）が与えられれば、その人を信用しないであろう。

信じやすい個人とはどのような人であろうか。信じやすさは個人の行動特性であり、その個人の多くの場面に現れる行動傾向といえる。その意味で「人を信じやすこと」は比較的安定した人格特性と考えることもできる (Rotter, 1980)。他者を信頼する傾向のように、日常の社会的場面で頻繁に現れる行動傾向は、人が社会に適応して生きて

いくうえで不可欠な行動の次元であり、全ての人に共通する資質である。信頼性の個人間の違いはその程度の違いである。このようにみると、他者に対する信頼性は、人の主要な性格特性（性格の5因子）のいずれかの次元と密接に関連していると予測できる。事実、調和性が高い人の主要な特徴に「人を信頼する」が含まれている (Nettle, 2007, p.29; Pervin, Cervone & John, 2005, p.255)。調和性が高い人は、利他的で他者を助ける傾向が強く、協力的で人を信じやすい。さらに、他者の気持ちに敏感で他者に同情する傾向が強い。これらの特徴は、一般信頼性と同じではないが、似た特徴を含んでいる。一般信頼性ではなく調和性の特性で信頼行動を十分説明できるかもしれない。

人を信じやすい人は、他者に関する情報がない場合もある場合もある人を疑うことが少ないのか。この際の人を信じやすいという特性としては一般的信頼性が適当なのかそれとも、性格の5因子の調和性が適当なのか。これらの問題に答えることを目的として、本研究は、場面設定質問紙の実験と性格特性の質問紙を実施した。

Ⅱ. 方法

場面想定法質問用紙を用いて、登場人物の行動がその人物の信頼性により影響を受けると考えられる場面を想定させた。登場人物の信頼性（ないしその欠如）を示唆する別の情報を提示した後、登場人物のとり行動を予測させた。参加者の個人特性については、一般信頼性と調和性、神経症傾向を調べた。神経症傾向は信頼行動と関連がないと予想した。

実験参加者 岩手大学学生120人（男性38人、女性82人、平均年齢 19.5歳、年齢の標準偏差1.1歳）が実験に参加した。120人の参加者を場面想定質問紙の登場人物に関する付加情報に関してランダムに40人づつ3つの条件に分けた。

手続き 実験参加者に実験用冊子を配布し、表紙の一般的な概要説明を読むように求めた。この説明では、5場面のそれぞれにおいて登場人物がとられると思われる行動を予測するように教示された。

5場面について登場人物の行動予測を行った後、冊子の最後で一般的信頼性と性格特性（調和性と神経症傾向）を測定する計15項目の質問項目に回答するよう求めた。実験の実施には、全体で10分から20分程度の時間を要した。

質問紙の構成 実験用質問冊子では5場面を提示した。場面は全実験参加者に対して同じ順序で提示された。ただし、付加される情報は3種類（ポジティブ、ニュートラル、ネガティブ）あり、冊子ごとに分けられた。

登場人物の行動予測部分では、その状況で登場人物がとり得る二つの行動（信頼に値する行動と利己的行動）が線分の両端に示され、実験参加者は登場人物の行動予測を線分上の当てはまる位置に○をつけて示した。線分には左端に0% = 信頼に値する行動を絶対にするで、右端に100% = 利己的行動を絶対にすると記されていた。

冊子の最後には[A]一般的信頼性（5問）と、[B]性格特性（各5問）を測定する質問紙が用意され、実験参加者は場面想定質問紙の回答と同様、1（全く同意しない）から4もしくは5（強く同意する）の当てはまる箇所に○をつけて回答した。回答形式は[A]は4件法、[B]は5件法であった。

尺度の値について：場面想定質問紙をつかって得られた疑いの程度は、大きい値が当該の人物に対する疑いが強いことを表した。一般信頼性の測定値は、大きい値が他者一般に対して信頼する程度が強いことを表した。同様に、性格特性の神経症傾向は、大きい値が神経症傾向が強いことを

表し、性格特性の調和性は、大きい値が調和性の特性が強いことを表した。結果は、全ての尺度値を平均50、標準偏差10の標準得点を使って報告する。素点から標準得点への換算は、120人の平均と標準偏差を使って行なった。

Ⅲ．結果

【付加情報の効果】

場面想定質問紙によって疑いの程度を測定したのであるが、その際に登場人物に付加する情報から3つの条件を設定した。登場人物が信頼できることを示唆する情報（ポジティブ情報付加）と登場人物が信頼できないことを示唆する情報（ネガティブ情報付加）と登場人物の情報なし（ニュートラル条件）の3条件である。この付加情報の効果を調べるには、参加者が3つの条件で一般信頼性および性格特性（神経症傾向と調和性）において均質であることが前提となる。そこで、まず3つの条件別に参加者の一般信頼性と性格特性を比較した。Table 1に3つ実験条件別に男女別を加えて参加者の得点の平均値と標準偏差を示した。得点には120人の参加者に対して平均50、標準偏差10となるように標準化した標準得点を使用した。表には場面想定質問紙によって測定した疑いの程度の得点もあわせて表示した。

偶然であるがニュートラル条件の男の一般信頼性が他の条件の参加者よりも低かった。参加者の数が10人と少ないため生じたのであろう。分散分析の結果は、付加情報の条件、男女の要因、それら

Table 1 実験操作条件別と男女別に参加者の特性を平均と標準偏差にまとめた

		人数	一般信頼性	神経症傾向	調和性	疑い
positive 条件	男	16	51.2 (8.7)	49.2 (8.3)	50.5 (8.9)	41.9 (8.2)
	女	24	49.4 (8.5)	48.7 (9.6)	49.6 (10.6)	42.3 (4.8)
neutral 条件	男	10	38.1 (10.8)	50.6 (12.9)	47.3 (9.6)	54.7 (6.5)
	女	30	50.3 (10.4)	48.6 (10.3)	49.0 (10.6)	47.2 (8.8)
negative 条件	男	12	50.5 (11.3)	46.2 (12.6)	49.1 (11.3)	61.3 (7.1)
	女	28	53.5 (8.1)	54.5 (7.6)	52.5 (9.4)	58.0 (5.9)

（ ）内は標準偏差である。

の交互作用とも全て5%水準で有意であり、ニュートラル条件の男の一般信頼性が他の条件の参加者よりも低いことを裏付けた。性格特性の神経症傾

向と調和性においては、実験条件と男女の間で違いはなかった（分散分析結果 $p>0.05$ ）。

次に、疑いの程度が登場人物に関する情報に

よって異なったかを男女の参加者に分けて調べたところ、付加情報の効果は明瞭に現れたが、男女の違いに関しては、やや紛らわしい結果であった (Fig.1)。登場人物についてポジティブな情報を与えられた人は、より低い程度で疑うが、逆にネガティブな情報を与えられた人は疑わしさの程度が高い。ニュートラル条件で男女差があるが、これは上に述べたようにこの群の男の一般信頼性が低かった影響であろう。分散分析の結果は、付加情報と男女の要因は有意（それぞれ $p < 0.01$, $p < 0.05$ ）であったが、交互作用は有意ではなかった ($p > 0.05$)。

【一般信頼性と調和性】

まず一般信頼性が高い人は、登場人物に関して付加された情報(ポジティブあるいはネガティブ)にどう反応したかを検討した。付加情報からポジティブ群、ネガティブ群、ニュートラル群に分けて、一般信頼性の程度の関数として疑いの程度が

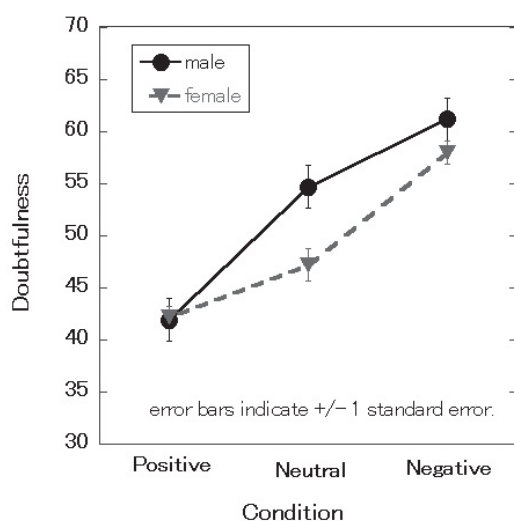


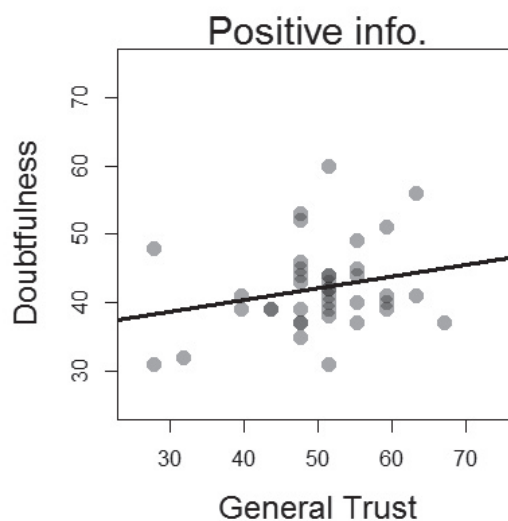
Fig.1付加情報と男女別に疑わしさの程度を表わした

どのように変化するかを調べた。Fig.2の各パネルに散布図と回帰直線を描いた。ポジティブ群とネガティブ群では、回帰直線の傾きは0とは有意に異ならなかったが、ニュートラル群 (No info.) では回帰直線は有意であった (Table 2)。登場人物に関する情報が付加されない場合は、参加者の一般的信頼が低ければ登場人物をあまり信用せ

ず、参加者の一般的信頼が高ければ登場人物を比較的高い程度で信用するという結果であった。しかしながら、この参加者間の一般的信頼の程度による違いは、登場人物に関してポジティブもしくはネガティブな情報が与えられると、ほとんど登場人物に対する信頼の程度には反映されず、むしろ付け加えられた情報がその人物に対する信用に影響した。

次に、説明変数に調和性を使って同様の分析を行った。Fig.3の各パネルに散布図と回帰直線を描いた。ネガティブ群では、回帰直線の傾きは0とは有意に異ならなかったが、ポジティブ群とニュートラル群では回帰直線は有意であった (Table 2)。登場人物に関する情報が付加されない場合とポジティブ情報が付加された場合は、参加者の調和性が低ければ登場人物をあまり信用せず、参加者の調和性が高ければ登場人物を比較的高い程度で信用するという結果であった。登場人物に付加される情報別がネガティブな場合は、参加者の調和性の高低は、登場人物の信用に影響しなかった (Table 2)。回帰分析結果を Table 2 にまとめた。

Table 2から明らかなように、一般信頼性よりも調和性の方が疑いの変動をより適切に説明しているが、重回帰分析を使い一般信頼性と調和性



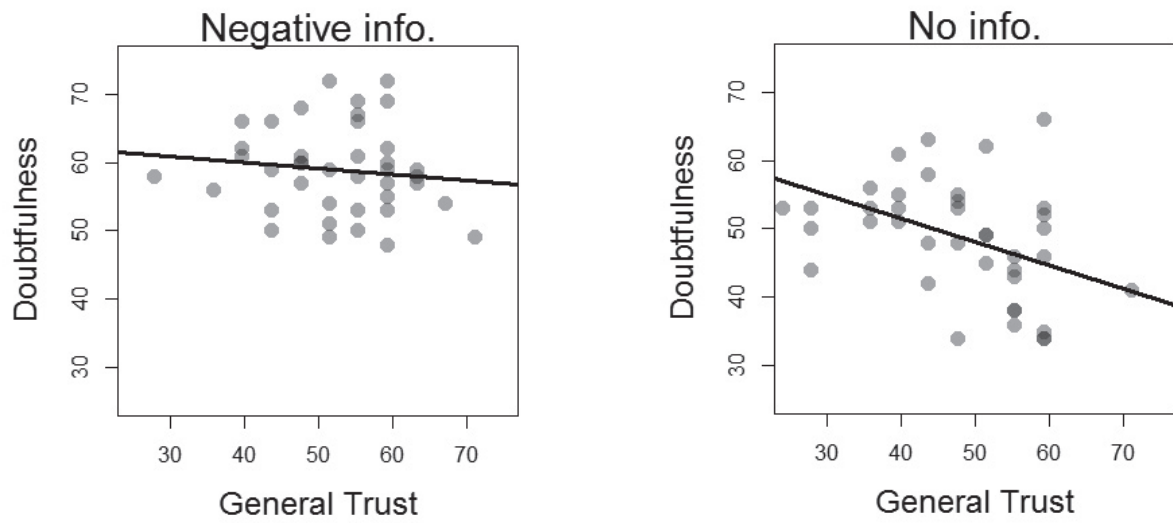


Fig.2 一般信頼性と登場人物を疑う程度の関係

○は個人を表わすが、濃い○は同じ位置に複数の参加者がいることを示す。

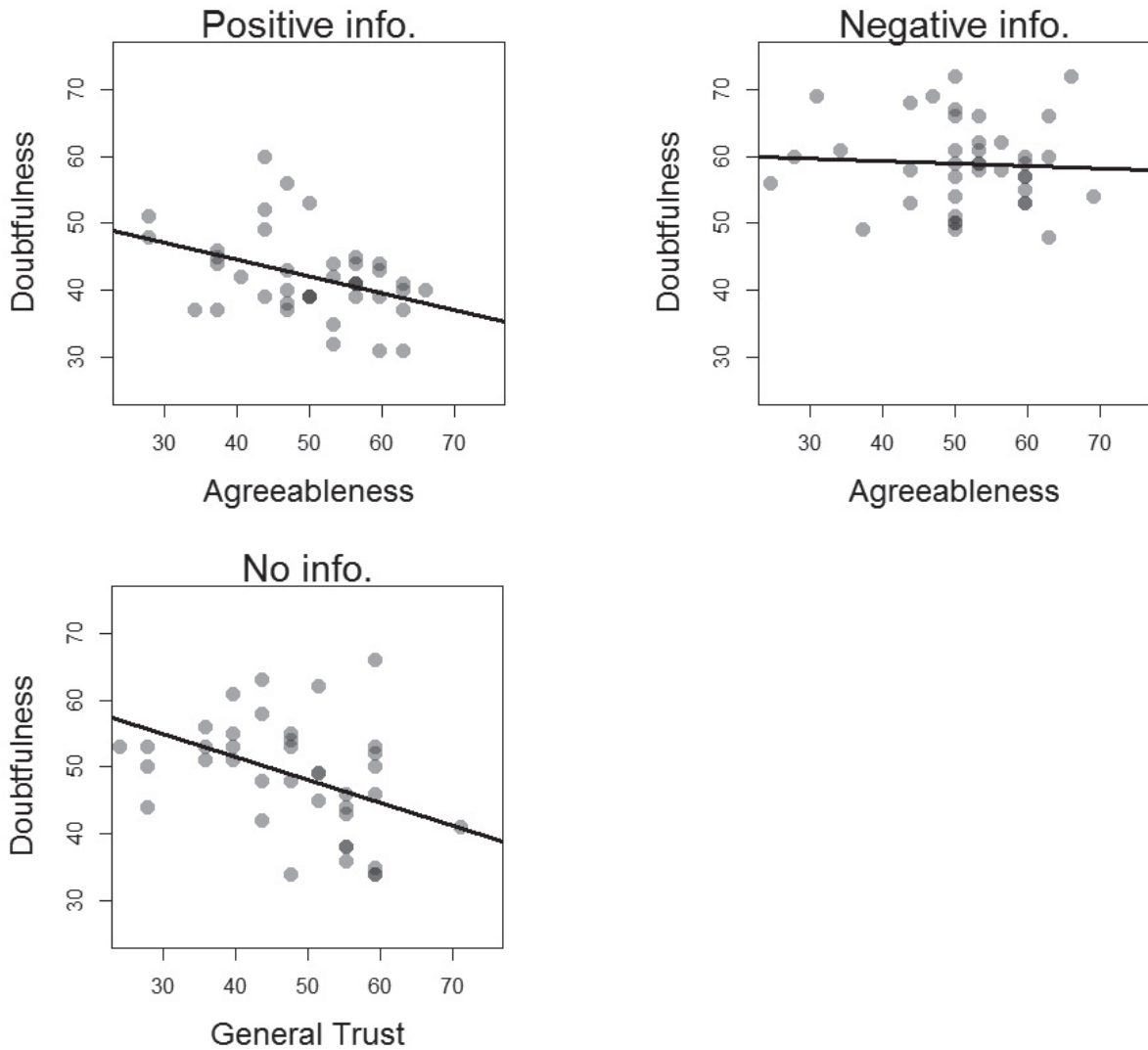


Fig.3 調和性と疑いの関係を付加情報別にプロットした

○は個人を表わすが、濃い○は同じ位置に複数の参加者がいることを示す。

Table 2 回帰分析結果

付加情報	一般信頼性			調和性		
	回帰係数	標準誤差	p 値	回帰係数	標準誤差	p 値
ポジティブ	0.173	0.12	0.14	-0.25	0.1	0.02
無し	-0.34	0.11	<0.01	-0.42	0.12	<0.01
ネガティブ	-0.09	0.11	0.44	-0.04	0.1	0.72

の効果を検討したところ、両変数に独立の効果を見出した。詳しくは、疑いを基準変量とし、一般信頼性と調和性を説明変数として付加条件別に分析したところ、ポジティブ条件では、一般信頼性 (0.21, $p=0.051$), 調和性 (-0.28, $p<0.01$), ニュートラル条件では一般信頼性 (-0.26, $p=0.016$), 調和性 (-0.34, $p<0.01$), ネガティブ条件では一般信頼性 (-0.08, $p=0.49$), 調和性 (-0.020, $p=0.85$) という結果を得た。予想されるように、一般信頼性と調和性の間には低い相関があった (Table 3)。この相関は統計的に有意であった ($t=2.59$, $df=118$, $p=0.01$)。

神経症傾向は登場人物に対する信用の程度に影響しなかった (回帰直線の傾き 0.10, $p>0.26$)。付加情報からポジティブ群, ネガティブ群,

最後に、実験参加者の個人変数 (性別, 一般信頼性, 調和性, 神経症傾向) と実験で操作した登場人物の付加情報 (ポジティブ, ニュートラル, ネガティブ) を説明変数とし、登場人物に対する信頼の程度を基準変数として、重回帰分析を適用したところ、一般信頼性と神経症傾向は有意な要因ではなかった ($p>0.27$)。性別は有意傾向であった ($p=0.063$)。もちろん登場人物の付加情報は有意な要因であった ($p<0.01$)。一般信頼性と神経症傾向を除いて再度 重回帰分析を適用したところ、性別と調和性と登場人物の付加情報の全てが有意な要因であった。分析結果を Table 3 に示した。厳密さを求めるならば、調和性と疑いの関連は付加情報の性質により変化するため、回帰分析に調和性と付加情報の交互作用の項を含める必要がある。ここでは、むしろ単純に調和性の影響を推定するために、説明変数を独立と仮定して分析した。

Ⅳ. 考察

人を信じやすい人も疑いを持つ

対人交渉の場面で、他人を信じやすい人ほど騙

Table 3 参加者の性格特性と一般信頼性の相関

	一般信頼性	神経症傾向
一般信頼性		
神経症傾向	0.071	
調和性	0.232	-0.083

ニュートラル群に分けても、神経症傾向と登場人物に対する信頼の程度に関連はなかった。

Table 4 重回帰分析結果

説明変数	回帰係数	標準誤差	t 値	p 値
性別 (男)	2.837	1.343	2.111	0.037
調和性	-0.2331	0.0626	-3.723	<0.001
付加情報 (ポジティブ)	-17.485	1.5227	-11.483	<0.001
付加情報 (ニュートラル)	-10.395	1.527	-6.805	<0.001

性別 (男) は、性別 (女) を default としたため。

付加情報については (ネガティブ) を default としたため。

されやすいのだろうか。人を信じやすい人は、他者に関する情報がない場合もある場合も人を疑うことが少ないのか。この疑問に答える先行研究は

すでに存在する (Rotter, 1967; 菊池・渡邊・山岸, 1997; 小杉・山岸, 1998)。調和性の影響を調べるためには、先行研究の結果を確認する必要がある。

あった。登場人物に関する情報がない場合は、調和性が高い人は低い人に比べて、相手をより信用する傾向があった。登場人物に関してポジティブな情報が与えられた場合も、調和性の程度の高低は相手を信用する程度に影響し、調和性が高い人は相手をより信用する傾向があった。これに反して、登場人物に関してネガティブな情報が与えられたときは、調和性の程度の高低は相手を信用する程度に影響しなかった。調和性が高い個人も低い人と同じように疑いを持ったのである。この結果は、先行研究の結果に一致している（Rotter, 1967； 菊池・渡邊・山岸, 1997； 小杉・山岸, 1998）。先行研究および本研究の結果から、人を信じやすい人でも、常に盲目的に他者の言うことを信じるわけではなく、他者に関する情報を利用して、信用する・信用しないの判断を下していると推測できる。他方、先行研究と異なる点もある。他者に対する信頼が高い人は、ネガティブ情報を与えられると、他者に対する信頼が低い人に比べて、他者をより低く信頼する（より疑う）という結果が報告されている（小杉・山岸, 1998）が、本研究の実験結果はこの結果に一致しない。測定上の天井効果の可能性もあるため、更なる検討が必要であろう。

一般信頼性よりも調和性

本研究の重要な目的は、人を信じやすいという特性としては一般的信頼性が適当なのかそれとも、性格の5因子の調和性が適当なのかを検討することであった。結果を見ると、一般信頼性と調和性の間には低い相関があるだけで、両者は同じ特性ではない。だが、回帰分析の結果からは調和性の方が一般信頼性より影響が強い要因であることが推測できる。一般信頼性よりは、調和性の特性の方が人を信じたり疑ったりする行動を上手く説明できそうである。もっとも、これは驚く結果ではない。先に述べたように、人を信頼することは人の社会的行動において不可欠の要素であるから、これほど重要な特徴が、個人の一般的行動特性に含まれないとは想像しがたい。他方、性格の

5因子は人の基本特性を過不足な含むといわれる。したがって、性格の5因子のどれかは人を信頼する特性に深く関わりと想像できる。

他方、一般信頼性と調和性の間に高い相関はなかったことに注目すべきである。一般信頼性には調和性に含まれない何かがあると仮定できる。一般信頼性が高い人は、盲目的に相手を信頼するのではなく、相手の信頼性が低いことを示す情報がある場合には、この情報に反応して他者の信頼性の程度を低く判断すると考えられている（菊池・渡邊・山岸, 1997）。実は、調和性にもこのような認知的特性が含まれている。

まず、調和性の得点と心の理論のテスト得点の間には中程度の相関がある（Nettle, 2007）。調和性が高い人は、他者の心の状態を推理する能力が高く、他者の心の状態に注意を払う傾向があり、その特徴は他者配慮的行動とよぶことができる。すなわち、調和性が高い人は、向社会的であり、他者を助け、調和的な対人関係を持ち、良好な対人関係をもつ。調和性が高い人は、他人に目を向け、心の状態を（自然に）推測するため、当然他者に関する情報に敏感である。調和性が高い人は、ポジティブ情報が与えられれば、それに応じて他者を信頼するであろうし、ネガティブ情報が与えられれば、反対に他者を疑うであろう。さらに、基本的に他者を信頼する傾向があるため、他者に対する情報がなければ、他者を信頼するであろう。Rotter（1980）がその先駆的研究で記述した高信頼者の特性は実は調和性が高い人の特性と一致する。

他者に関する情報について

本研究では、場面設定質問紙を使用して登場人物に対する信頼を測定したが、登場人物に関する情報は同じ質問紙に併記されていた。1つの問題点は、人を信じやすい人は、この登場人物に関する付加情報をそのまま信用して登場人物の信頼を評定したのではないかという疑問である。ネガティブ情報が付加された場合は、それをそのまま信用したために、登場人物の信頼性を低く評定し

た,といえる。言いかえると,与えられた情報を簡単に信用したための反応であり,これは登場人物に対する信頼性を低下させた結果ではない,という解釈が可能であろう。この問題を解決するには,次に述べるような実際場面に近いゲームを利用して,付加情報の効果を検討する方法があるう。

実際場面と質問紙の違い

本研究では,場面設定質問紙を使用して登場人物に対する信頼を測定した。この質問紙に答えるということと現実には他者と対面して,あるいは電話で話をして,相手を信頼するとは別なことではないか。質問紙は十分に現実の場面を代替していないのではないか,という疑問は当然生じる。これに対して,囚人のジレンマゲームを使って,高信頼者の方が低信頼者よりも相手の行動に敏感に反応することが報告されている(垣内・山岸, 1997)。金銭のやり取りなどのゲームを使用して,場面想定質問紙以外の方法で人の信頼と疑いをさらに調べる必要がある。

人を信頼しやすい人の再考

私たちによくある理解では,一方に他人の行動の細部を吟味せず,善意や悪意,隠し事や深慮遠謀を推測する習慣をもたず,人の言動を額面どおりにうけとり素朴に人を信じる人がいる。その対極に,何事も疑う猜疑心が強い人がいる。「人を見れば泥棒と思う」人である。このような素朴な人物観は,おそらく現実にはそぐわない。本研究の結果から見ると,人を信頼する人とは,向社会的傾向を強くもち,他者配慮的行動パターンをもつ人である。反対に人を信頼しない人とは,冷淡で敵意があり,自己中心的で不正直な人であろう。そして,人を信頼しやすい人を一口で表わすならば,調和性が高い人といえる。だまされやすい人とだまされにくい人という次元は,すでにRotter(1967)により半世紀前に指摘されているが,人を信頼しやすい人・信頼しない人の次元とは別の次元と考えるべきであろう。

謝辞

実験に参加していただいた岩手大学教育学部の皆さんに感謝します。本論文は、立花琴子の卒業論文(岩手大学教育学部2015年1月提出)の実験データにもとづき作成された。

引用文献

- Garaske, J.P. 1975 Interpersonal trust and construct complexity for positively and negatively evaluated persons. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 1, 616-619.
- Garask, J.P. 1976 Personality and generalized expectancies for interpersonal trust. *Psychological Reports*, 39, 649-650.
- 垣内理希・山岸俊男 1997 一般的信頼と依存度 選択型囚人のジレンマ 社会心理学研究, 12, 212-226.
- 菊地雅子・渡邊席子・山岸俊男 1997 他者の信頼性判断の正確さと一般信頼性－実験研究 実験社会心理学研究, 37, 23-36.
- 小杉素子・山岸俊男 1998 一般的信頼と信頼性判断 心理学研究, 69, 349-357.
- Nettle, D. 2007 *Personality*, New York:Oxford University Press.
- Pervin, L.A., Cervone, D, John, O.P. 2005 *Personality – Theory and research (9th ed)*, John NJ: Wiley & Sons, Inc.
- Rotter, J. 1967 A new scale for the measurement of interpersonal trust. *Journal of Personality*, 36, 651-665.
- Rotter, J. 1971 Generalized expectancies for interpersonal trust. *American Psychologist*, 26, 443-451.
- Rotter, J. 1980 Interpersonal trust, trustworthiness, and gullibility. *American Psychologist*, 35, 1-7.
- Yamagishi, T. 1986 The provision of sanctioning system as a public good. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 110-116.

Yamagishi, T. & Yamagishi, M. 1994 Trust and
commitment in the United States and Japan.
Motivation and Emotion, 18, 129-166.